

メディア情報に対する批判的読解の必要性に気づかせる授業実践

～新聞の読み比べ 読解をグラフで可視化する～

京都橘高等学校 長谷川 卓也

生徒にメディアの情報には意図があることを理解させ、またその情報を批判的に読み解く必要性を実感させるにはどうすればよいか。新聞の読み比べ体験によってこの問題の解決を試みた。記事のタイトルを見た場合、本文を流し読みした場合など、読みの深さに応じて記事の解釈が変化する。またメディアの違いによって異なる解釈が生まれる。この解釈の変化と相違を、グラフによって可視化し生徒に示した。

1. はじめに

社会全体の情報量が増ただけでなく、スマートフォンやタブレットなどの情報端末の普及により、一個人が情報にアクセスできる機会やアクセスできる情報量も増えた。そのような中、情報を批判的に読み解く力の重要性は高まる一方である。平成 21 年度の新学習指導要領では、科目「社会と情報」の内容として「情報の受信及び発信時に配慮すべき事項を理解させる」ことが挙げられている。ここでの受信時の配慮とは、情報に誤りや偏りがあるかもしれないということを理解し、批判的思考をもって読み解くということである。批判的読解力を育成するには、まず批判的読解の必要性を生徒に実感させなければならない。その点を目標とした新聞の読み比べの実践（2008 年度「情報 A」）について振り返る。

2. 実践報告

2.1 授業の背景

全クラスの生徒が「情報 A」を第 1 学年で 1 単位、第 2 学年で 1 単位を履修する。第 1 学年の 2 学期にメディアリテラシーに関する授業を 7 コマ実施した。そのうちの 1 コマで新聞（社説）の読み比べを行なった。

第 1 学年の 3 学期に沖縄研修旅行がある。そのため、題材は沖縄に関するものを選んだ。具体的には次の 2 紙の社説を用いた。生徒には順に A 紙、Y 紙と紹介した。

朝日新聞『集団自決判決—司法も認めた軍の関与』2008 年 3 月 29 日

読売新聞『集団自決判決 「軍命令」は認定されなかった』2008 年 3 月 29 日

2.2 授業の流れ

2.2.1 導入部

授業の趣旨を「大江健三郎は『沖縄ノート』に、沖縄の集団自決は軍の命令によるものと記した。それに対し、元軍人はそれは誤りであると主張し、慰謝料を求め裁判を起こした。その判決に対する社説を読み比べる」と説明した。

2.2.2 展開部

次の 4 点を、5 つの段階で回答させた。

- | |
|------------------------------------|
| ①組番氏名 |
| ②記事の種別（『A 紙』か『Y 紙』かの選択） |
| ③いつの段階の解釈か（5 つの段階から選択） |
| ④軍の強制があったかどうか
（『強制あり』『強制なし』の選択） |

回答は Google Docs（現 Google Drive）のフォーム機能を利用した。フォームに入力したデータは Google Docs のスプレッドシート（表計算アプリ）に即座に出力される。

なお、5 つの段階とは次のとおりである。

- | | |
|--------|--------------------------------------|
| 第 1 段階 | 「社説を読む前」 |
| 第 2 段階 | 「社説を 3 秒間読んだ後」
（見出しに目を通すような状況） |
| 第 3 段階 | 「社説を 30 秒間読んだ後」
（短時間で記事を流し読みする状況） |
| 第 4 段階 | 「社説を 3 分間読んだ後」
（普通の速さで読む状況） |
| 第 5 段階 | 「2 紙の社説を読み比べた後」 |

第 2 段階から第 4 段階については、その時間における読みが、どのような状況を想定しているの

かを（ ）内に示した。読みの深さにより、どのような解釈が生まれるのかを調べようとした。

第2段階の前に社説を印刷したプリントを裏向けにして生徒に配布した。教室の右半分の生徒にはA紙の社説、左半分の生徒にはY紙の社説を配布した。

そして、3秒間記事を読み（図1）、時間が経ったら再びプリントを裏向けさせた。そして前述のとおり回答させた。



図1 社説を読む生徒

30秒間読んだ後、3分間読んだ後も同様に回答させた。

最後に、もう一方の社説、つまり先ほどA紙を受け取っていた生徒にはY紙を、Y紙を受け取っていた生徒にはA紙を配布した。そして、それらを5分間読ませ、回答させた。

2.2.3 授業のまとめ

各段階における、軍の「強制あり」と答えた割合を、新聞社ごとにまとめた。回答の集計（6クラス194名分の集計）結果を表1・図2にまとめた。

なお、生徒には自分のクラスの集計結果と、それまでに授業を実施した全クラス生徒の合計集計の結果を示した。

最後に、「読みの深さ（見出しに目を通しただけか時間をかけて読んだのか）によって解釈が変化する」「新聞社にはそれぞれの主張がある。新聞社の違いによって、異なる解釈が生じる」との教員の考察を示した。

そして、「正確に記事の内容を理解するには、見出しに惑わされず、しっかりと本文を読まなければならない」「複数のメディアの情報を読み比べることで、偏りのある解釈を防ぐことができる」と、メディア情報の読解における心構えを示して授業を締めくくった。

表1 「強制あり」の回答の割合

段階	A紙	Y紙
社説を読む前	70.7%	77.7%
3秒 読んだ後	88.5%	30.0%
30秒 読んだ後	88.9%	57.6%
3分 読んだ後	90.6%	51.1%
読み比べ後	82.8%	81.3%

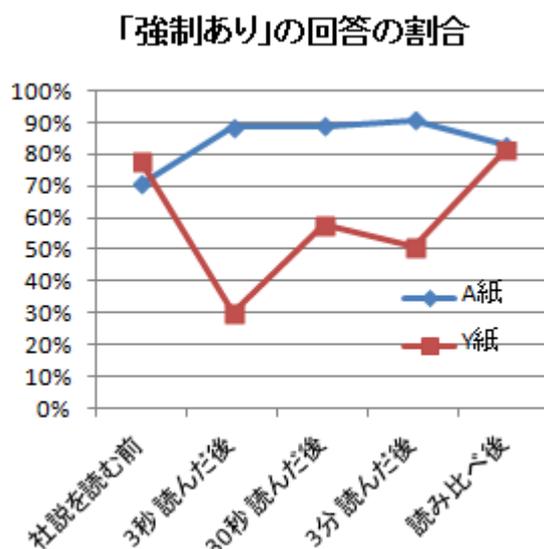


図2 回答集計グラフ

3. おわりに

読みの解釈をグラフ化することで、批判的読解の必要性をより明確な形で生徒に示すことができた。一定の成果は得られたと推測するが、改善の余地は大きい。特に、授業のまとめでは、教師側の見解を示すのではなく、生徒から考察を引き出すべきであったと反省している。回答集計グラフから読み取れることは何か、また自分たちはメディアに対しどのような心構えを持つべきかなどを考えさせることで、批判的読解が必要であるという意識を、生徒の心に根付かせることができる。

参考

- (1) 文部科学省『高等学校学習指導要領』平成21年
- (2)(3) 朝日新聞・読売新聞（本文中で明示）
- (4) 大阪私学教育情報化研究会『第59回公開授業』
<http://www.osaka-sigaku.net/past-www/open/081114/index.html>